

## 改訂3版への序

2018年1月に改訂第5版の胃癌治療ガイドラインが出版されました。ガイドライン第4版の出版時には本書の改訂はできませんでしたが、今回第5版の出版に伴って、実際のガイドラインに則した内容とすることができました。これまでもたくさんの方の医師、看護師、そして患者さんにご利用いただいた本書ですが、今回時代にマッチした最新情報をお届けし、患者さんには医師の説明の補足として、医療者には、わかりやすく最新の治療内容を説明する際の助けとしてご利用いただくと確信いたします。

がんという病気には、0%も100%もありません。すなわち絶対に治せるものでもないし、絶対に治せないものでもありません。だから、どの治療を選び、どのように進めていくか、を考えるとときには、医療者と患者さん自身との対話、それを通しての信頼と納得が不可欠です。十分な納得なしに受けた治療で結果が悪いとき、患者さんの後悔はいかばかりでしょうか。確率だから科学的には仕方がないのですが、患者さんの人生は1回しかありません。すべての患者さんが納得して治療を受けることができるように、本書が少しでもお役に立つならば望外の喜びです。

本書のこの改訂までに胃がんでも免疫チェックポイント阻害薬が使用できるようになりました。他がん腫では、多発肝転移や多発肺転移の完全な消失例などが少なからず報告されていますが、胃がんではまだまだその域には達していないようです。がん細胞が均質であればあるほど、この治療も効くようです。

5年前の序文でも書きましたが、胃がんにおいてはいわゆるprecision medicineがなかなか進みません。その最たる原因は胃がん組織におけるがん細胞の不均質性であり、一人の人の一つの癌の中に多様ながん細胞が混在することとされています。がん幹細胞(stem cell)の研究も行われてはいますが、未だ華々しい成果は上げておりません。それだけにすっきりした絶対的な方針を立てにくいステージもあるのですが、本書が、患者さんが説明に納得して、心から信頼して治療を受けられる先生に巡り会うことができる一助となることを心より祈っております。

2018年4月9日

兵庫医科大学集学的腫瘍外科特任教授

笹子三津留

## 初版の序

本シリーズは、患者さんが読まれて自分の病気の治療選択に役立てる場合、あるいは医師から患者さんにこの本を提供していただき、治療の説明を補うものとして役立てる場合を想定して出版されています。患者さんに治療を行う場合には、説明と同意が原則であることに異存のある医療者はいないと思うのですが、患者さんからは、「難しい説明でよく分からなかったけれど、専門家の言葉を信用して、治療を任せました」という言葉を今でもよく耳にします。「インフォームドコンセント(説明・同意)」は、実際には「説明・理解・納得・同意」、あるいは「説明・理解・選択」のどちらかが行われてこそ、“本当に分かり合ったインフォームドコンセント”といえるのではないのでしょうか。

本書では、今まで不足しがちであった「理解」の部分を、可能な限り患者さんに分かりやすい内容でお示しできるように、各分野のエキスパートに豊富な経験を活かして、かみ砕くように書き下ろしていただきました。また、たくさんの分かりやすい図も付けていただきました。分かりにくいところがありましたら、どしどし質問をお寄せください。それにより、この本が改訂時にさらによくなることと思います。

ただ、この本を上手に使っていただくには、担当医の適切な情報の提供が重要です。本書の一つ一つの話は一般論としては分かるとしても、自分の病状が正確に診断されて、伝えられていない限り、正しい選択に結びつけることはままなりません。担当医の適切な情報があってこそ、分からないことを担当医に質問し、治療法を選択する際に、本書が生きてくるのだと思います。また、担当医は可能な限り治療前の分かっている情報を提供して、相互の理解に役立てていただきたいと思います。

しかし、治療前の診断には常にある程度の誤差が含まれていること、最善を尽くしたうえでも治療結果には個人差があること、治療には必ず一定頻度で望まない有害事象(副作用、合併症、後遺症など)が生じ得ることをお互いが理解したうえで、治療を選択していくことが重要になります。本書では、そのようなことにも可能な限り言及して、ご理解いただけるようにしたつもりです。

本書が、医師の説明のための補助資料として、また、胃がんの治療を受けようとしてされている患者さんのお役に立つことを切に願っております。

2007年7月

兵庫医科大学教授(外科)

笹子 三津留